

追悼 宮田登氏の逝去を悼む

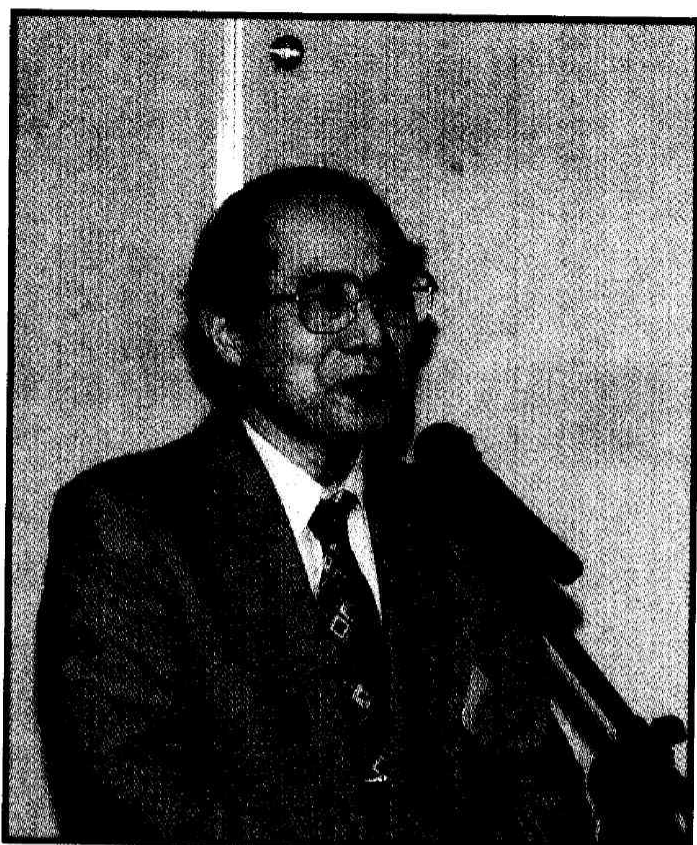
宮田登氏は、二〇〇〇年二月十日、薬効むなく逝去された。肝臓癌との壮絶な闘いの果ての逝去であった。

宮田氏は、一九三六年十月十四日横浜市神奈川区の神奈川大学の近くで生まれ、横浜市立翠嵐高校を卒業するまで、そこで幼少時代をすごした。大学は、東京教育大学文学部に進み、和歌森太郎・桜井徳太郎らの民俗学者に学び、同大学助手として研究生活をスタートさせた。七三年東京学芸大学助教授に就任し、七六年筑波大学助教授に転任、同年に東京教育大学から文学博士の学位を取得した。さらに八二年同大学教授に昇任、その後九四年神奈川大学教授に転じた。

その間、国立歴史民俗博物館教授・国立民族博物館教授・国際日本文化研究センター教授などを併任し、また、一橋大学、埼玉大学、東京外国語大学、静岡大学など多

くの大学で教鞭をとり、研究活動の傍ら後進の教育にあたり、多くの優秀な民俗学研究者を送り出した。

また、宮田氏は、大学教授としての社会的責任も十分すぎるほど果たした。東京都各区および東京都の文化財保護審議会委員、文化庁文化財保護審議会委員などを歴任し、静岡県史、大田区史、岩井市史、板橋区史、牛久市史、武蔵村山市史など全国各地の自治体史の編纂委員を務めた。さらに、学会関係では、日本民族学会、口承文芸学会、日本宗教学会、日本民俗学会などで理事を務め、特に日本民俗学会では代表理事を務め、文字通り学会の大黒柱として活躍した。さらに、宮田氏の活動は、海外にもおよび、アメリカ合衆国、フランス、韓国、中国などで学会発表を行い、まさに日本を代表する民俗学者として名声を博した。



1998年6月
「第2回常民文化研究講座」
懇親会でのあいさつ

こうした宮田氏の八面六臂の活躍は、いうまでもなく研究者としての多くの業績によって支えられていた。宮田氏は、早くもその処女作とでもいうべき『ミロク信仰の研究』によって宗教民俗学者としての地位を確立していたが、その研究範囲は宗教民俗学の範囲をはるかに超えて展開していった。「現在の学」としての民俗学の再生への希求は、宮田氏をして「都市民俗学」の提起へと向かわせ、女・こども・老人と民俗学の対象分野を次々と拡大していった。宮田氏の柔軟な発想と広い学識は、一専門分野を超えて、日本の民俗社会の歴史と構造の解明に重要な貢献を成し遂げた。

あまりにも専門分化が進み、人間と社会の全体に迫るような研究が乏しくなっている現在、宮田氏の広い視野と深い思索は極めて貴重であった。また、様々な専門分野の研究者を結合させ総合する力が宮田氏にはあった。本来の意味での学際的研究を推進する能力は、宮田氏の人格ともあいまって他の追随をゆるさないものがあった。その意味で、宮田氏を失ったことは、学界全体にとってこの上ない損失である。

ひるがえって、本研究所にとつても、宮田氏の逝去は大きな打撃であつた。宮田氏は、神奈川大学に赴任するにあたって、これからはもう少し研究に専念したいという願望をもらしていた。しかし、現実には開設したばかりの歴史民俗資料学研究科の委員長や、常民文化研究講座の企画責任者やら大学の広報誌への執筆やらと少しも忙しさを減らしてさしあげることができなかった。本研究所の所員となつて六年、やつと宮田氏と共同研究が実現できそうになつた矢先であつた。これから、宮田氏と研究・調査を共にしながら宮田氏からいろいろなことを学ぼうとしていたところであつた。宮田氏の希望をかなえられなかったという反省も込めて、所員一同痛恨の想いを禁じえない。

今は、宮田氏のご冥福をお祈りするばかりである。

(K・T)